

分布：本州・四国・九州

ナンテン

(メギ科)

学名：Nandina domestica

ナンディナ ドメスティカ

別名：南天竹(ナンテンチク)、南天燭(ナンテンシヨク)、ナルテン、ナツテン

主な生育場所

公園や庭木などに鑑賞用として植栽される。関東以西の暖地では山地の溪流沿いなどに自性する。半日陰を好み、強い西日が当たるような場所を嫌う。また、水はけの良い土地を好む。

特徴

中国原産の常緑の低木で樹高は1～3mほど。株立ちし、分枝せずにまっすぐ伸びる。直径2～3cmほどの幹の先端に羽状複葉を互生する。初夏に円すい状に花序を伸ばし、白い六弁花を多数つける。径6～7mmほどの丸い果実は晩秋から初冬にかけて鮮やかな朱色に熟す。果皮は薄く、中に1～2個の白い種が入る。



名前の由来：冬に目立つ赤い果実に野鳥が集まることを食堂の灯火(中国名で南天燭(ナンテンチュウ))に見立てた。また葉が竹に似ることから南天竹とも呼ばれ、これらを音読みしナンテン。

<農業との関係>

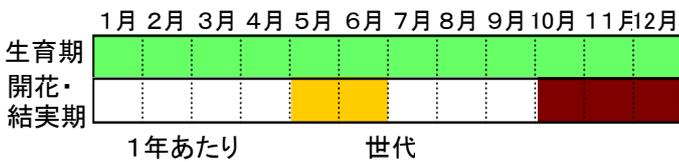
ナンテンの実が真っ赤に熟するのは二十四節季の大雪(12月7日ごろ)のころで、雪国では収穫した野菜を保存するために雪の中に埋める作業を行う目安となる。また、石川県奥能登地方では、年の暮れのこの頃に、ユネスコ無形文化遺産にも指定された、田の神様へおもてなしを捧げる祭事「あえのこと」がおこなわれる。ナンテンはその年の収穫への感謝を象徴する植物の一つである。



食堂の灯火に見立てられた密集する赤い果実

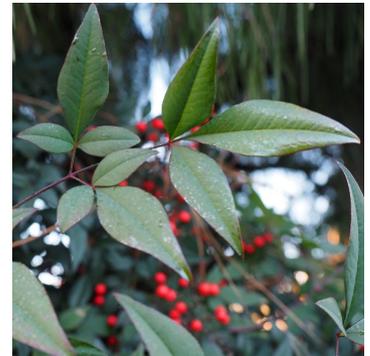
<生活史>

関東地方の例(目安)



<類似種>

ナンテンと同様に初冬に赤い実が成り、庭先によく見かける小低木にセンリョウ(千両)やマンリョウ(万両)があるが、センリョウもマンリョウも複葉とならず葉の縁は波打つか鋸歯がある。またトキワサンザシ(ピラカンサス)の枝には棘がある。



小葉は革質でやや光沢がある

<一言うちく>

ナンテンは「籬を転ずる」に通ずる縁起の良い樹木とされますが、御祝い膳の赤飯や魚料理にナンテンの小枝が添えられるのは、縁起を担ぐだけでなく、葉に含まれる「ナンジン」が熱や水分に触れることにより防腐作用がある「チアン水素」を発生させ腐りにくくする効果もあるのです。

<人との関わり合い>

縁起木や厄災除けとして、玄関前や鬼門や裏鬼門に植えられてきた。また、さまざまな園芸品種も作り出され、白い実のシロナンテン、葉が黄色から赤に紅葉するオタフク南天、葉が糸状となる錦糸(キンシ)南天などがある。果実に含まれるドメスチンは運動神経の末梢に対しマヒ作用があり、ぜんそくなどの咳止めに効果がある。ハチ刺されには、よく揉んだ葉の汁をつけると痛み止めになる。ナンテンの葉や果実を刻みお茶にすると咳止めだけでなく、疲労回復や強壮などにも効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：冬(南天の実、実南天)、初夏(南天の花)】	日当りに南天の実の笑初 (高澤良一)
日当りや南天の実のかん袋 (小林一茶)	風なくば好き日和なり実南天 (小野房子)
とやかくの家相を払ふ実南天 (能村登四郎)	しぐれたるあとの日が射し実南天 (鷺谷七菜子)
南天の花の白さのめでたけれ (高野素十)	麒麟の間南天の花を見て坐る (山口青邨)